

[特別活動]

低学年のスタートダッシュプログラムが親和的な 学級集団育成に及ぼす影響

— チームで短期集中的に実践したソーシャルスキル教育の効果について —

瀧澤 恵介*

1 問題の所在

子どもたちの人間関係が希薄化し、友達との関係づくりを行うことのできない子どもが増加している。小学校に入学後、落ち着いて課題に取り組んだり、静かに話を聞いたりすることができず、授業が成り立たない状況が見られる。この問題は「小1プロブレム」として注目され、深刻な状態にある。

一昨年度、1年生を担当して「小1プロブレム」の状況を目の当たりにした。子どもたちは机に座っていることができず、立ち歩きをする。担任が話をしていても、手いたずらをしており聞いていない。友達同士で話しても相手の目を見て話を聞こうとしない。自分の言いたいことを言ったら、友達の話は全く聞こうとしない。このような実態が見られ、学びに向かう学級集団として成立していなかった。そのため、時々口論になったりトラブルになったりして、授業に落ち着いて取り組めない状況にあった。

これらの根本的な問題は、児童のソーシャルスキルが未熟なためではないかと考えた。河村(2009)は、「対人関係がうまくいかないのは、その人の持って生まれた気質によるものではなく、ソーシャルスキルという技術が未熟なことから、その技術を学習すれば対人関係は向上する」と述べている。その上で「親和的で建設的にまとまった学級では、多くの子どもたちが配慮のスキルとかかわりのスキルを高い段階でバランス良く活用している」ことを指摘し、「対人関係がうまく築けない子ども、荒れた雰囲気や暗い雰囲気のある学級では、配慮のスキルとかかわりのスキルの活用レベルが低いか、バランスが悪くなっている」ことを示唆している。

伊佐(2014)は学習したスキルを定着させるためには、般化を促す環境をつくることが大切であると述べている。自学級のみでなく、学年部・学校全体へとソーシャルスキル教育の範囲を広げることで、習得したスキルを日常場面で定着させることができる。その際、課題となるのは指導者のソーシャルスキル教育に対する温度差であることを指摘している。そこで、1・2学年部でチームを組んで取り組むことにより、温度差をなくすと共に般化しやすい環境を整えることが大切であると考えた。

以上のことから、「配慮」と「かかわり」のソーシャルスキルを高めることによって、親和的で建設的にまとまった学級集団を育成していきたい。ソーシャルスキルを高める多くのプログラムは、ある程度の期間の中で実施しているものが多いと思われる。しかし、日々の学習に一刻も早く落ち着いて取り組めるようにする必要から、短期間に行った先行研究は見当たらない。そこで、本論文ではチームを組んで短期間で集中的にソーシャルスキルトレーニングを行った際の効果について検証する。以下、本プログラムをスタートダッシュプログラムと呼ぶ。

2 研究の目的

本研究は、チームを組んで短期間で集中的にソーシャルスキル教育を行うことにより、ソーシャルスキルと学級集団の状態に及ぼす影響を検証する。

3 研究の方法

- (1) 対象学級 小学校 第1学年 学年児童数56名 (男子27名 女子29名)
- (2) 調査期間 2014年6月～2014年10月

* 魚沼市立堀之内小学校

(3) 調査材料と手続き

① ソーシャルスキルの変容について

ア hyper-QUソーシャルスキル尺度を用いた調査

- ・事前調査 2014年6月4日
- ・事後調査 2014年10月28日

イ 学年アンケートを用いた調査

hyper-QUソーシャルスキル尺度の質問項目以外で、「配慮」と「かかわり」のスキルについてより詳細に調べるために作成したアンケートである。1・2年生の学級担任と養護教諭5人のチームで、気になる点を出し合い聞くことを中心とした20項目からなるアンケートを作成し、実施した。

- ・事前調査 2014年8月30日
- ・事後調査 2014年9月28日

② 学級集団の変容について

ア hyper-QU満足度尺度を用いた調査

- ・事前調査 2014年6月4日
- ・事後調査 2014年10月28日

(4) 実践の手続き

① 実態把握・・・hyper-QUソーシャルスキル尺度と作成した学年アンケートで、学年の実態を調査する。

② プログラム作成・・・実態把握を元に児童に不足している「配慮」と「かかわり」のソーシャルスキルを抽出し、それらを高めるプログラムを作成する。

③ 介入のスケジュール

- ・2014年9月1日（月）～9月12日（金）までの2週間
- ・朝8時20分～8時40分までの20分間（計12回）
- ・振り返りカードを記入し、児童の達成度と変容を見取る。

④ hyper-QUや学年アンケートから、学級集団の変容について調べる。

4 実践の概要

(1) 事前調査

① ソーシャルスキル尺度

図1は、6月に実施したhyper-QUソーシャルスキル尺度を用いて測定した結果である。「配慮」のスキルでは、「聞く態度」と「きまりの遵守」の項目が低かった。特に「きまりの遵守」は全国平均を13%下回った。学校生活の中で、ルールを守って生活する意識が低い実態が見られたので、早急に改善する必要がある。「聞く態度」は、全国平均を3%下回り、落ち着いて話を聞くことが苦手である。「かかわり」のスキルは、「感情表出」の項目が低かった。自分の気持ちを、素直に友達に伝えることができないことが分かった。

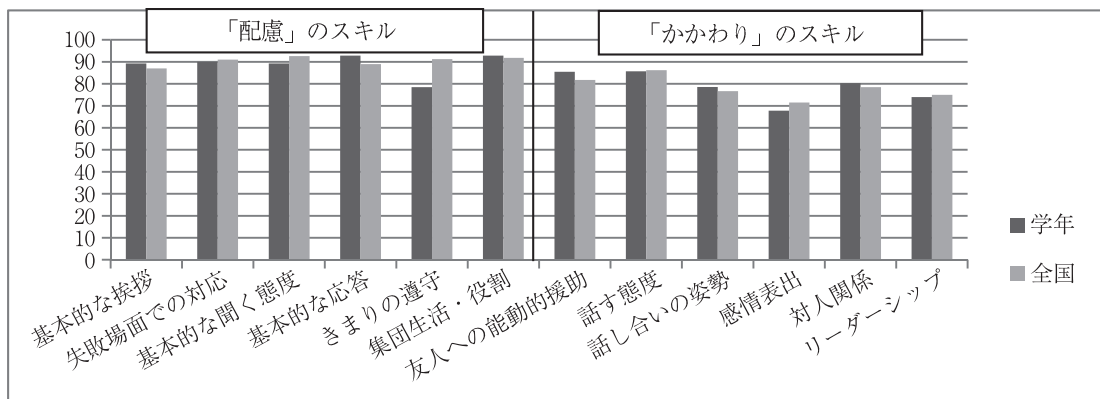


図1 6月のhyper-QUソーシャルスキル尺度の結果

② 学年アンケートによる実態把握

表1は、作成したアンケート項目である。図2は、事前に学年の実態を把握するために行った学校生活についてのアンケートの結果である。グラフは、質問項目別に肯定的回答の割合をレーダーチャートで表したものである。外側に行くほど肯定的割合が高く、中心に近いほど肯定的割合が低い。

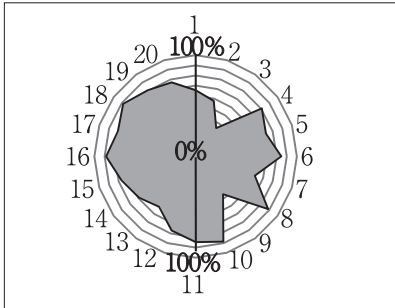


図2 学年アンケートの結果 事前調査

アンケート結果から、2・3の「話を聞くスキル」、7・9の「集団の中で配慮するスキル」が特に低かった。13・14・15の「かかわり」のスキルも低く、友達と上手に関わる事ができない実態を裏付ける。

そこで、「配慮」のスキルの中で、特に「聞くこと」や「あやまる」のスキルと「かかわり」の中の相手を意識した関わり方のスキルを中心に、ソーシャルスキルの向上に取り組む必要があると考えた。また、同時にきまりを守る大切さについても理解させる必要がある。

③ hyper-QU満足度

図3は、6月に行ったhyper-QU学級満足度の調査結果を全国平均と比較したものである。

学級満足群が23%、侵害行為認知群が18%、非承認群が33%、不満足群が26%であった。非承認群が最も多く、学級で認められていない思いをもつ児童が多くいる実態があり、また、不満足群が26%と、学校生活に満足していない児童も多かった。

(2) スタートダッシュプログラムの作成

上記の結果から、次のスキルが不足していることが分かった。①児童一人一人の「配慮」のスキルの不足（特に話の聞き方ときまりの遵守のスキル）、②「配慮」と「かかわり」のスキルがバラバラなので、集団凝縮性が高まらない（「かかわり」のスキルの不足）の2点である。この2つのスキルを向上させることで、学級が改善されるであろうと考えた。これらを考慮し、「配慮（特に聴く）」のスキルと、相手を意識して自分の気持ちを伝え合う「かかわり」のスキルを中心にしたスタートダッシュプログラムを作成した。

プログラム作成上留意したことは、スキルの改善が目的ではあるが、児童が心地よさを感じることを前提として、楽しんで取り組めるゲーム的内容を取り入れたことである。また、児童の意欲が落ちないように、「配慮」と「かかわり」のスキルを交互に組み込んで実施するようにした。「配慮」のスキルを高めてから、少しずつ「かかわり」が増やしていけるようにする流れでプログラムを組んだ。そして、プログラムのルールを作って遵守することで、より良い活動になることを実感できるように心掛けた。ルールを守る大切さを児童に感じ取らせるためである。

表2は、作成したスタートダッシュプログラムの計画である。

表1 アンケート項目

- 1 友達や先生が話をしている時はその話を聞いていますか。
- 2 友達や先生が話をしている時はずっと見て聞いていますか。
- 3 友達や先生が話をしている時は体を動かさず聞いていますか。
- 4 友達や先生が話をしている時は体を向けて聞いていますか。
- 5 友達や先生が話をしている時は立っていても座っていても集中して聞いていますか。
- 6 友達の真面目な話は、冷やかさずに聞いていますか。
- 7 何か失敗した時には「ごめんなさい」と言っていますか。
- 8 班活動で友達が一生懸命やって失敗した時は許していますか。
- 9 みんなで決めたことには、従っていますか。
- 10 友達が何かをうまくした時「上手だね」とほめていますか。
- 11 友達の気持ちを考えながら話していますか。
- 12 何かお願いする時相手に迷惑かからないか考えていますか。
- 13 相手が傷つかないように話をしていますか。
- 14 初めて会った人でも、話をしますか。
- 15 相手に聞こえるような声で話していますか。
- 16 みんなと同じくらい話していますか。
- 17 何かをしてもらった時に「ありがとう」と言っていますか。
- 18 自分がしてもらいたいことを、友達にしてあげていますか。
- 19 友達と一緒にいて頭にきたことがあっても「カーッ」とした態度をとらないでいますか。
- 20 友達とケンカした時に自分も悪い所がないか考えますか。

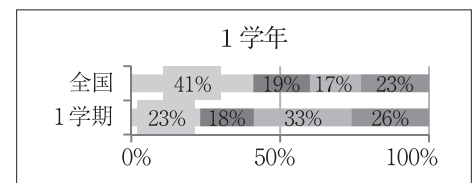


図3 hyper-QU満足度の全国との比較結果

表2 スタートダッシュプログラムの計画

時数	活動名 : ターゲットスキル	
1	配慮	口パククイズ : 相手に注意を向けて聞くことができる。 内容 教師の口の動きから言葉を読み取る。
2		目と目でぴったんこ : 相手の目を見て話を聞くことができる。 内容 教師の短い3文程度の話を、目をそらさずに最後までしっかり聞く。
3		おうむになっちゃった : 相手の言葉を聞いて復唱することができる。 内容 1・2年生でペアを作りお話の文を1文ずつ読んで復唱する。
4		話を聞いて〇×クイズ : 話を最後までしっかりと聞くことができる。 内容 教師の話聞いた後で、内容に関するクイズが出る。〇×カードを挙げてクイズに答える。
5		私は誰でしょう : 身体を動かさずにしっかりと聴くことができる。 内容 3つのヒントを出し、最後まで聞いてから答える。
6	かかわり	仲間集めゲーム : 誰とでも仲良くかかわり合うことができる。 内容 男女、異学年など、条件にあった人と指定された人数で集まる。
7		じゃんけん列車 : どんな人とも仲良くかかわり合うことができる。 内容 どんな人とも仲良くじゃんけん列車で遊ぶことができる。
8	配慮	めざせ!あいさつ名人 : 自分からすすんであいさつをすることができる。 内容 10人以上に「おはよう」の挨拶をすることを目標とし、名前を呼んで目を見て挨拶をする。
9		めざせ!マナー名人 : 場面に合った言葉を選んで伝えることができる。 内容 仲間集めゲームで4人組を作り、時と場に応じた挨拶のカードを順番に選ぶ。
10	かかわり	「はい」と「いいえ」 : 相手の質問に対して適切に答えることができる。 内容 1・2年生のペアで、相手の質問にハッキリと答える。友達と違って考えを言えるようにする。
11		何でもバスケット : どんな人とも仲良くかかわり合うことができる。 内容 1人が円の真ん中に立ち、何人かに当てはまることを言う。
12		なべなべそこぬけ : どんな人とも仲良くかかわり合うことができる。 内容 学年クラスごとに分かれ、全員が手を繋いでなべなべそこぬけをする。

(3) スタートダッシュプログラム介入の様相

① 実施期間と時間設定及び活動場所

9月1日(月)～9月12日(金)の2週間、毎日の朝活動の20分間を使い合計12回のスタートダッシュプログラムを実践した。広く動く活動の際には体育館を使うなどしてプログラムの内容によって活動場所を工夫した。

② プログラムの展開

教示→モデリング→リハーサル→振り返り、という流れを崩さぬよう、どのプログラムでも児童が同じ流れで取り組めるように心掛けた。導入時に前回は行ったプログラムの振り返りを行い、本時に行うスキルについて説明してから活動に入った。教師が説明をする際には、好ましくないモデル・好ましいモデルを提示し、どうすると良いのかを学習してから活動に入った。児童もプログラムが進むにつれて毎朝の活動に慣れ、「今日のスタートダッシュは何だろう」と楽しみにしている姿が見られた。

③ 振り返り

教室に戻って自分の本時の活動を振り返りカードに記入した。本時で扱ったターゲットスキルについての到達度を自己評価した。プログラム開始当初は評価が低い時もあったが、回数を重ねるにつれて向上した。「スタートダッシュプログラムのルールを守ればきちんと話が聞ける」という実感を児童が持ち始めてきたことの現れである。

④ プログラムの改善

プログラムを実践していく中で、児童の実態とずれている点がいくつか明確になってきた。苦手だと思っていたスキルが比較的良くてきたり、反面うまくできなかつたりするなど、プログラムを見直す必要が出てきた。実施日の放課後にチームで反省会を行い、次回への流れを確認した。具体的には、次の点である。プログラム6の仲間づくりのスキルでは声を掛けられても無視したり、自分の好きな人と組もうとしたりしてグループが作れない実態が見られた。そこで、自分から進んで声を掛けること、友達から声を掛けられたらお礼を言ってグループを作ることを確認し、翌日改めて仲

間集めゲームを行った。1回目の反省を生かし、声を掛けられた際にどう対応すればよいのかが分かったので、スムーズに仲間づくりをすることができた。

⑤ 般化の工夫

図4はこれまでに学習したスタートダッシュプログラムルールである。

低学年部で日常的に意識して取り組めるように、プログラムで学習したスキルを、5つのルールとして各学級に掲示した。これにより、学習したことを日常生活の場面でも生かせるように心掛けた。

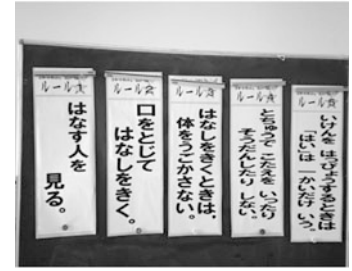


図4 スタートダッシュプログラムのルール

5 研究の結果と考察

(1) ソーシャルスキルの変化

① hyper-QUソーシャルスキルの変容

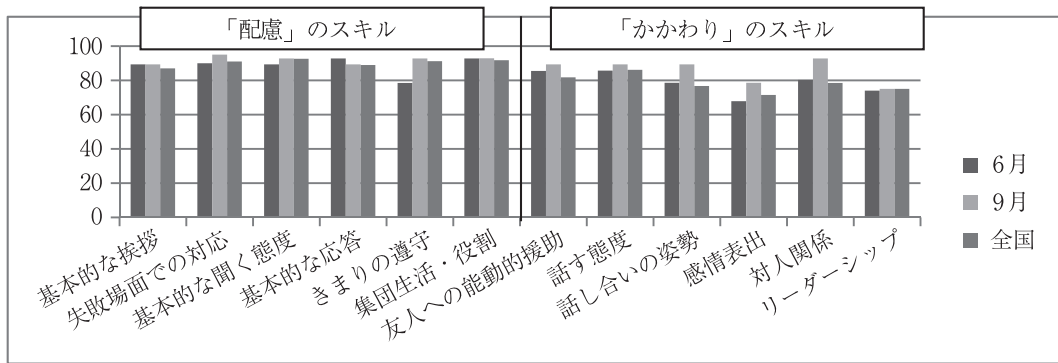


図5 6月と9月のhyper-Q-Uのソーシャルスキルの変容

図5は、6月と9月のhyper-QUソーシャルスキルの結果を示したものである。「配慮」のスキルの「きまりの遵守」は14%向上した。プログラムを通したルールの掲示による意識の向上の成果である。「かかわり」のスキルの「話し合いの姿勢」「感情表出」が共に11%向上したのは、プログラム10で、自分の気持ちをきちんと伝える話し合いの方法を学習できたからである。「かかわり」のスキルがどの項目も向上しているのは、児童の実態を担任がしっかりと把握してプログラムの改善を図り、相手の気持ちに沿って自分の思いを伝えられる「かかわり」のスキルのプログラムを組んだことで、友達とより良くかかわることができるようになったからであると考えられる。児童の振り返りカードからは、「グループが作れるようになって良かった」「楽しかった」と、活動を楽しんでいる感想が多く見られた。

② 学年アンケートの変容

図6は、スタートダッシュプログラムを終えての学年アンケートの結果である。

事前の回答と比べてみると、1と2の質問項目が31%と34%、3の質問項目が53%上昇した。これは、スタートダッシュプログラムの1、2、3、4、5の「聞く」スキルの取り組みで良い話の聞き方を児童が身に付けることができた成果であると推察する。

7の質問項目は34%、17の質問項目は15%向上した。これは、スタートダッシュプログラム9の場に応じた挨拶の取り組みにより、適切な対応の仕方を学習できたからであると思われる。9の質問項目が42%向上したのは、プログラムを通してルールを守ることの大切さを実感することができたことによると考える。13・14・15の項目については、プログラム6、7、10、11、12で取り組んだ「かかわり」のスキルにより、友達と仲良くかかわる方法を学習できたからである。スタートダッシュプログラムを通して肯定的回答が増加したことが分かる。

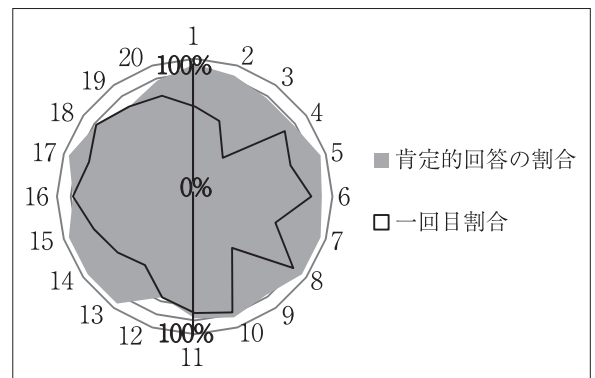


図6 学年アンケートの結果 事後調査

振り返りカードでも、「聴くためのルールを守るとよく聞けた」という感想が多く、スキルの大切さを実感すること

ができた。

(2) 学級集団の変容について

図7は、6月と10月に行ったhyper-QUの学年プロット図の比較である。表3は、承認得点と被侵害得点の比較である。

図7では、「配慮」のスキルの向上によりルールを意識するようになり、全体的に右よりにプロットが移動した。また、「かかわり」のスキルの向上により、プロット図が全体的に上に上昇している。学級生活満足群は23%から54%へと上昇した。満足群に入る児童が増加したことで、学級に対して居心地の良さを感じる児童が増えてきた。侵害行為認知群が18%から7%、非承認群は33%から18%へと減少した。

表3の承認得点と被侵害得点の平均を比べると、承認得点は3.3上昇し、被侵害得点は0.7減少した。振り返りカードでは、友達と仲良く関われる喜びについての記述が多く、児童は友達と親和的に関わるができるようになってきた。

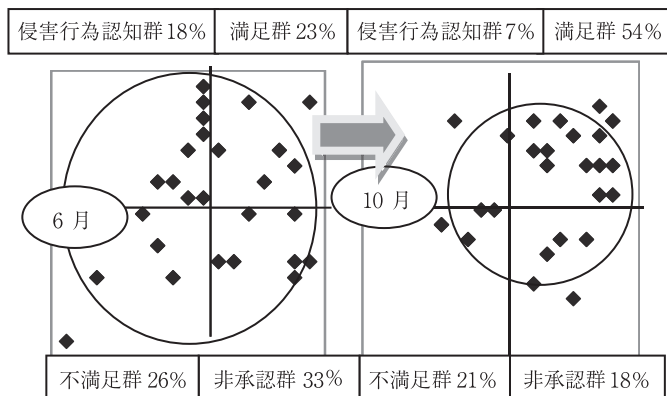


図7 6月と10月のhyper-QU 学年プロット図

	6月	10月
承認得点	17.3	20.6
被侵害得点	12.3	11.6

表3 6月と10月の承認得点と被侵害得点の平均の比較

6 まとめと今後の課題

1年生では本来、学習したスキルを時間をかけて般化することが大事であるが、毎日の授業の中でソーシャルスキルを向上させていくには時間がかかる。そこで、短期間で集中して行うことで、早期に落ち着いた環境をつくり、児童の学習を保障していく必要がある。スタートダッシュプログラムの実践により、児童は落ち着いて学習することができるようになった。授業中の立ち歩きも減り、手いたずらをしたり友達とお喋りしながら聞いたりする姿も見られなくなり、学習に向かうことができる集団になってきた。友達とのトラブルも少なくなり、学校が楽しいという児童の声も聞こえるようになって、親和的な学級集団に近づくことができた。

今後の課題として、鉛筆の持ち方、椅子の座り方、起立・礼の仕方など、より個人的なスキルにまでトレーニングの幅を広げていくことで、多様なスキルの向上に繋がるのではないかと考える。また、今回行ったのは9月の上旬であったが、早い4月・5月の段階で取り組んでいくことでより習熟が図れると考える。

今後も、ソーシャルスキルトレーニングを学校生活の中に積極的に取り入れ、児童がより良い学校生活を送れる学級集団へと高めていきたい。

参考・引用文献

伊佐貢一 「全校一斉方式ソーシャルスキル教育」 図書文化 2014年, 8-34pp
 今村綾乃 「小規模校の学級における話し合い活動体験が固定化された人間関係に及ぼす影響」 上越教育大学学校教育総合研究センター 『教育実践研究 第22集』 2015年, 187-192
 河村茂雄 「学級ソーシャルスキルCSS 低学年版」 図書文化 2009年, 18-31pp
 小林真弓 「まとまりのある学級集団形成に向けた指導の工夫—小学校低学年におけるスキルの定着をめざした「スタートダッシュプログラム」の開発—」 2016年
 国立教育政策研究所 「スタートカリキュラム スタートブック」について 2015年